

危機の予兆を察知するには

四天王寺大学准教授
浪速少年院篤志面接委員

茂木 洋

誰にとっての危機か

危機介入とは、危機的状況にある人に対して行われる援助のことを指しますが、そもそも危機とは何でしょうか。危機とは、個人を圧倒し、本人が試みる解決への取組がごとく失敗してしまうような脅威が存在する状況を指す、と考えられています。

では保護観察において危機的状況に置かれるのは誰なのか、誰にとっての危機なのか。これは、次の二つの側面から捉えることができます。一つは保護観察対象者（以下「対象者」といいます。）自身の危機で、対象者のコントロールを外れ、対処できないような状況が生じてしまう事態です。この場合、対象者が置かれている危機的状況に、周囲がいかに援助的に介入するかが課題となり、対象者をエンパワーする（力づける）ことにより、対象者自らが状況をコントロールして立ち直りを目指していけるよう支えていくことが目的となります。

もう一つは、関わる側である保護司や保護観察官が置かれる危機です。この場合、安全が脅かされ身

の危険を感じるといふ危機をまず考えると思いいますが、その他によく起こり得るものとして、専門性が脅かされるといふ危機があります。例えば、対象者に対する関わりが限界を感じ、更生保護を目指した専門的な関係が維持できなくなったり、更生保護の目的に沿った関係から逸脱してしまう事態が生じたりするかもしれません。これは重大な危機的状況であり、この状況への援助的介入の目的は、本来の目的である専門的な関わりを保てるように支えることです。

このように、危機には、対象者側の危機と関わる側の危機という二つの側面がありますが、そのどちらの側に生じている危機かを分けて捉えていくことが有用です。対象者自身が危機に陥り方向性を見失っている状況と、関わる側が危機に陥り適切な関わりができなくなっている状況とは、どちらか一方しか起こらないというものではなく、しばしば同時に起こります。そのような同時発生的な危機的状況に対処する際、この二つの側面から考えていくと、多角的な介入が可能になります。すなわち、対象者に

どのように介入するかというプランを立てると同時に、関わる側の危機をどのようにサポートしていくかを考え、両面から危機的状況に介入することが可能になります。

危機の予兆を知る手掛かり

危機的状況には早期に気付くことが求められます。対象者側と関わる側双方に危機が生じているのですから、その状況が長引けば長引くほど、双方の関係は複雑になり、対処が難しくなるでしょう。早期に気付くことができれば、対応は比較的シンプルに考えられます。では、予防的に早期に発見するために心掛けること、つまり危機の予兆を知る手掛かりとは何でしょうか。

身体化・行動化しやすい対象者の場合は、その本人が危機的状況にあることは比較的容易に周囲に気付かれます。むしろ、一見適応的に見える対象者で、表立った行動には現さないが、ひそかに危機的状況に陥ってしまったっている、あるいは、内的な不安定さを抱えてしまっている対象者の方が、周囲が気付く

のが遅れると考えられます。派手に行動化している対象者の方が危機的かという点、実はそうではない場合もあり、出来事の見掛けの大きさだけで危機の程度を判断してはならないということに、私たちは気を付けなければなりません。

このように考えると、やはり早期発見のために必要なのは、丁寧な観察に尽きます。では、どの点をどのように丁寧に観察していけばよいのでしょうか。何をどのように観察すればよいか

まず一点目、対象者に対して「意図的な観察」を丁寧に行うということ。「この対象者の場合、この点が非常に課題であり、気掛かりである」というポイントを明確にして、そこに意識を向け観察を行っていくということ。これは通常、私たちが対象者に関わる時に行っている観察方法でしょう。

二点目は「非意図的な観察」です。意識的に注意を向けているポイント以外でも、私たちは対象者の様々な変化に気付くことがあります。特別に注目していない部分についての、この非意図的な観察の精

では、対象者側ではなく、関わる側に注目して丁寧な観察を行っていきます。

関わる側に生じる逆転移という反応は、例えば他の対象者以上に特定の相手のことばかり考えてしまうようになるか、ある対象者に対してむやみに強い否定的な（あるいは肯定的な）感情を抱いてしまふなど、普段の自分とは異なる状態の自分として現れます。そして、そのような状態の自分を適切にコントロールできず途方に暮れてしまうという感覚を伴うことも少なくありません。もちろん、関わる側に生じる状態の全てが逆転移だとは限りませんが、その状態を相手の変化に対する援助者側の反応かもしれないと考えてみることは重要です。

非意図的な観察や自己観察では、今何が起こっているかを、自分では十分に捉えられない場合があります。逆転移という反応は無意識に行われているのでなかなか気付きにくく、また感情的にも動かされているために、冷静に考えることが難しくなるからです。そのようなときは一人で対処しようとするのではなく、関係者や他の専門家と連携し、コンサル

度は、相手の様子を私たちが日頃一つのイメージとして捉えているかどうかにかかっています。相手の存在が一つのイメージとして私たちの中に形づくられていると、そのイメージから相手が細かく逸脱したとき、あるいは逸脱しそうなとき、私たちは何か違和感を感じます。例えば、いつもと表情が違う、話し方が違う、態度に何か違和感があるという点から、対象者の変化を察知したという経験は珍しいことではないでしょう。

三点目は対象者に対する観察ではなく、私たち自身に対する観察、「自己観察」です。保護観察において、対象者は切り離された観察対象ではありません。保護観察という作業は、関わりを通して行われるものであり、対象者と保護観察に関わる者とは、相互に関係し合っています。それゆえ、対象者側に生じる変化は、その関係を通して、関わる側にも何らかの反応を引き起こします。心理学ではこの現象を逆転移と呼びます。上述した非意図的な観察も、相手の細かい逸脱に関わる側に違和感を生じさせるといふ、逆転移の一例といえることができます。自己観察

テーション(指導や助言)を受けながら理解を深めていかねばなりません。すなわち、危機を予防的に発見するには、日頃から関係者と連携的な援助、あるいは話合いの場を持ち続けることが重要となります。

危機を理解する

「危機」には「分かれ目、峠」という意味があります。それは、危険であると同時に、そこを乗り越えることで新たな局面へと進むことができる転機でもあるということです。したがって、危機を単に排除すべきものとみなすだけでは十分ではありません。危機の予兆を察知することで危機的状况に至る前にその状況を把握し、そこで何が起こりつつあるのかを理解し、その後の適切な介入に生かそうとする姿勢を持つことが大切でしょう。

